# エキゾチック・リージョナリズム
## 1990 年代後半以降におけるアイコン的建築のコンテクストへの対応について
Exotic Regionalism: Contextual Approaches of Iconic Buildings Since the Late 1990s

学籍番号　47-076820
氏　　名　有井 淳生（Arii, Atsuo）
指導教員　大野 秀敏 教授

**0. 序**

1950、60 年代から都市再開発による問題が顕在化する中、モダニズムへの批判とともに「コンテクスト」という概念が建築思潮の中で重要視されるようになった。一方 1990 年代後期以降、コンテクストを一見まったく無視したような「アイコン」と呼ばれる建築が台頭している。近年のアイコン的建築の増加は 1997 年に完成したゲーリーによるビルバオ・グッゲンハイム美術館を契機としていると言われる。グッゲンハイム美術館の観光面での成功は大きな注目を集め、「ビルバオ・エフェクト」という言葉が用いられるに至った。だが、このようなアイコン的建築の隆盛という状況の中で、コンテクストを形態の拠り所とした新たなアイコンが出現している。本論文の目的は、このような建築の社会的背景をあきらかにするとともに、これをコンテクストを重視した設計姿勢の中に位置づけることである。

「ビルバオ・エフェクト」とは衰退した都市の変革を目的とした経済発展のための文化的戦略として独創的な建築を利用することを指す。本論文においてもこの文脈にしたがい、都市あるいは観光地における形態が独創的な公共建築のことをアイコン的建築と呼ぶ。

また「コンテクスト」という語は、1960 年代初頭には主として「特定の建築物にとって背景となる環境の物理的形態」を意味する語として用いられた。しかし現在は「特定の建築物に関する、歴史的、文化的、地理的な背景となる条件」を指す語としてより広い意味でも用いられる。本論文では両者を区別するため、後者を指す場合には「〈コンテクスト〉」と表記する。

第一章では、〈コンテクスト〉概念の変遷を概観し、その意味内容と、〈コンテクスト〉を重視した設計姿勢について整理する。次に第二章でアイコン的建築の形態的特徴と経済的背景をあきらかにし、アイコン的建築とコンテクストとの関係について考察する。続いて第三章で、「エキゾチック・リージョナリズム」の特徴と一章で示した設計姿勢との関係についてあきらかにし、その社会的背景について検討する。そして第四章でこれに批判的考察を加える。

**1. 現代建築における〈コンテクスト〉概念**

**1.1 コンテクスチュアリズム**

コンテクスチュアリズムという設計姿勢は、コーネル派のシューマッハーの 1971 年の論考により理論的に規定された。シューマッハーの論におけるコンテクストとは特定の建築物の周囲の建物や広場、街路などの物理的環境を意味していた。シューマッハーはモダニズムの設計姿勢を「理想形」を指向したものであると分析し、「理想形」をコンテクストに合わせて調整し「変形」する設計上の立場を提唱した。

同じくコーネル派のコーエンは 1974 年の論文においてシューマッハーのコンテクストとコンテクスチュアリズムの概念を拡張した。コーエンはシューマッハーのコンテクスト概念を物理コンテクストと呼び、新たに文化的コンテクストという概念を示した。文化的コンテクストとは、意味論の水準に属する〈コンテクスト〉である。これに対応する文化的コンテクスチュアリズムの例としてコーエンは、ファサードの形式と

して「建築的バナキュラー」を採用し、周囲に存在する建物を想起させることによって建築物をコンテクストに同化させるという方法をあげた。コーエン自身も認めているが、このように意味が介在する〈コンテクスト〉への対応には鑑賞者の解釈という問題が関わる。どの建築的バナキュラーによって建物の周囲の環境が代表されるかが自明でなければ文化的にコンテクスチュアルか否か決定しがたい。また、意味が介在することは〈コンテクスト〉の地理的範囲が拡大することを意味する。

**1.2 クリティカル・リージョナリズム**

クリティカル・リージョナリズムという立場は 1981 年にツォニスとルフェーヴルが提唱し、その後フランプトンが広めたと言われる。コンテクスチュアリズムが都市再開発による開発と保存の問題を背景としているのに対して、クリティカル・リージョナリズムは地球規模での開発によって引き起こされる諸問題を背景としている。そのため、クリティカル・リージョナリズムはコンテクスチュアリズムと比較して、より広い概念を〈コンテクスト〉として扱っている。

クリティカル・リージョナリズム論者の〈コンテクスト〉概念をまとめると、まず建築物の周囲の物理的環境である建物や、広場、街路だけでなく、地形、地域の気候、光があげられる。さらには地域の構法や地域特有の建築構成要素、そして歴史、地域的資源なども〈コンテクスト〉に含まれる。

また、〈コンテクスト〉への対応方法は、地域的構成要素を用いる、地域の物理的環境の尊重ないし強調、アナロジーにより地域の建物を連想させる、メタファーにより地域の歴史を想起させる、そして地域的資源を取り入れることだとまとめることができる。

フランプトンと、ツォニスとルフェーヴルの論点において異なるのは地域に対する考え方である。フランプトンは地域に属す建築家を前提としており、限られた地域を表現することをクリティカル・リージョナリズムの目的だと述べている。一方、ツォニスとルフェーヴルは、建築家は地域に属す必要はないと主張し、クリティカル・リージョナリズムは特定の集団を支持するものではなくグローバルな集団のアイデンティティの形成を指向すると述べている。

**2. アイコン的建築**

**2.1 アイコン的建築の特徴**

アイコン的建築は〈コンテクスト〉とも地域性とも一見まったく関係性を持たない建築である。ジェンクスはアイコン的建築の三つの条件として「新しく、凝縮されたイメージを与える」こと、「図としての性質が強い形態」であること、そして「都市の中で目立つ」ことをあげている。「都市の中で目立つ」ということは、建物のアイコン性はそれ自身では成立しないということを意味する。つまり、周囲の環境との比較において建物ははじめてアイコンとなることができる。このことは 2006 年の OMA の「ドバイ・ルネサンス」の計画に示されている。ここで提案された板状のボリュームは普遍的な建築類型であるが、複雑な形態をした建物の中にあっては相対的にアイコンになる。つまり、アイコン的建築もコンテクストを前提としているが、シューマッハーのコンテクスチュアリズムとは逆方向の対応を取るのだといえる。コンテクスチュアリズムの建物はコンテクストに同化するのに対して、アイコン的建築はコンテクストと対立する。

ドバイ・ルネサンス、OMA、2006

**2.2 アイコン的建築の経済的背景**

アイコン的建築のコンテクストへの対立は経済的背景によってその正当性を得ている。1970 年代からはじまった近年のグローバル化がその根底に存在する。グローバル化は資本を場所の束縛から解放するので、資本家にとって労働供給、資源、環境などの場所的差異が重要なものになる。つまり都市にとっては物理的、経済的環境において特別な質を備えた場所を確保することが資本を引きつける上で重要となる。それが存在しなければ新たにつくることが必要に

なる。このような経済的観点からみると、アイコン的建築には特別な質を持った場所をつくり出す役割が期待されているといえる。つまりコンテクストに同化するのではなく、積極的に新しいコンテクストをつくることがアイコン的建築には要請される。

都市間競争における場所の差異化を目的とした近年のアイコン的建築の増加には、その前提となる都市政策の変更という制度的背景が存在する。都市間競争という状況の中で、シビルミニマムの保障から経済成長のための環境整備へ西欧諸都市の政策は移っていった。都市再生はこの新しい都市政策の中心に位置する。

ビルバオ・グッゲンハイム美術館のような計画は都市再生の文脈では「フラッグシップ」と呼ばれている。フラッグシップとは「都市再生において触媒的な役割を果たす、重要な、人目を引く、一流の土地や建物の開発」のことを指す。フラッグシップにはその計画自体による経済効果だけではなく、建物のイメージによってメディアを通して都市を象徴するという役割が期待される。つまり、フラッグシップであるアイコン的建築にとってはその視覚的側面は二次的ではなく、それ自体重要な要素となる。

## 3. エキゾチック・リージョナリズム

アイコン的建築はコンテクストと対立することが一つの前提条件であったが、このことはすべてのアイコン的建築が〈コンテクスト〉と完全に断絶していることを意味するわけではない。

例えばビルバオ・グッゲンハイム美術館ではシューマッハーのコンテクスチュアリズムと類似した方法によって〈コンテクスト〉への同化が試みられている。美術館の建物の大部分はチタン・パネル仕上げの曲線的なボリュームから構成されており、このボリュームの形状と表面の材質によって都市の中で際立った外観をしている。だが、南側の通りに面する一部分は石灰石で仕上げられた矩形のボリュームで構成されている。ゲーリーは 19 世紀後半から 20 世紀前半にかけて建てられた通りの向かい側の既存のオフィスとアパートメントに合わせて南側の立面を矩形にしたと言われる。

### 3.1 エキゾチック・リージョナリズムの定義

一方、建物の主たる形態的コンセプトを〈コンテクスト〉から取り込んでいるアイコン的建築が近年存在する。

ピアノは 1998 年、ニューカレドニアのヌメアにティバウー文化センターを完成させた。この建物は、緩やかな円弧状に配置された「カーズ（住居小屋）」と呼ばれる 10 棟の塔状のボリュームを大きな特徴としている。カーズとはさまざまな機能を持つ空間がカナク族の伝統的な家の形態に似ていることから名付けられた名前である。1991 年の設計競技に提出された当初の案は、さらに地域の住居に近い形態であったが、ピアノは設計の過程でカーズと地域の住居との類似性を和らげるために形を修正したと述べている。

ティバウー文化センター、ピアノ、 浅草文化観光センター、隈、2009
1998

一方 2009 年、隈研吾の浅草文化観光センター計画案は設計競技において最優秀賞を獲得した。この提案は、切妻と方流れ屋根の平屋を積層したようなボリュームが大きな特徴である。隈はこの計画においてロケーションや用途から、判り易さを大事にしたと述べている。また担当スタッフの藤原は雷門と仲見世の存在によるコンテクストの特異性について指摘しており、街のコンテクストと浅草独特の文化を前提とした建物にしたかったと述べている。

つまり、これらの建物の形態的コンセプトはそれぞれ、〈コンテクスト〉である住居の建築類型や雷門／仲見世を拠り所にしているといってよい。そしてその結果として、形態的類似によりこれらの建物は〈コンテクスト〉を象徴している。以下、これらの事例と一章で整理した設計姿勢とを比較していく。

シューマッハーのコンテクスチュアリズム

は建物の意味の側面を扱っていないため、これらの例とは異なっている。一方、コーエンの文化的コンテクスチュアリズムは、以上の例と同様に〈コンテクスト〉を象徴する形態に関する戦略であった。しかし、コーエンの場合、「建築的バナキュラー」の採用は開口の様式やバルコニーなど、建物の表層面に限られていた。先の二例において形態と〈コンテクスト〉の要素との類似を成立させる上で根本的役割を果たしているのは、そのボリュームである。

フランプトンのクリティカル・リージョナリズムには、アナロジーという〈コンテクスト〉への対応方法が存在した。フランプトンはボッタのリヴァ・サン・ヴィターレの住宅について、かつて地方に栄えた伝統的な塔状の避暑用別荘への参照が見られることを指摘している。つまりこれはボリュームのレベルでの形態と〈コンテクスト〉との類似という点で先の例と共通している。

しかし、先の作品例はフランプトンのクリティカル・リージョナリズムの立場とは一致しない。第一に、フランプトンはクリティカル・リージョナリズムの主体として基本的に地域に属する建築家を想定している点である。第二に、フランプトンは建物の記号性と視覚性の偏重、さらにメディアに批判的な姿勢をとっている点である。先の二例はアイコン的建築であり、社会経済的理由から地域を象徴する記号としての役割が重要視される建物である。またメディアはアイコン的建築が地域を象徴する上で必要不可欠であり、視覚的側面はアイコン的建築にとって本質的要素である。

一方、ツォニスとルフェーヴルのクリティカル・リージョナリズムは主体を地域の建築家に限定していなかった点、形態をコンテクストから引き出すことを指摘している点で、先の二例に最も近いといえる。しかし、ツォニスとルフェーヴルは 2003 年の著書においてクリティカル・リージョナリズムの概念を大幅に拡張しており、そこでは特に「コンテクストを重視している」とは考えられない事例も紹介されている。

そこで、先の二例が代表する設計姿勢を「エキゾチック・リージョナリズム」と名付けたい。一般化していえば、エキゾチック・リージョナリズムとは特定の〈コンテクスト〉の要素を、建物のボリュームのレベルでの形態的コンセプトとして取り込む設計姿勢のことである。

### 3.2 エキゾチック・リージョナリズムの社会的背景

エキゾチック・リージョナリズムの社会的背景は四点あげられる。

第一に、場所の歴史的連続性への欲求である。ハーヴェイは 1970 年代以後の時間的圧縮と空間的圧縮によって、個人的、集合的アイデンティティの拠り所として場所が重要視されることと指摘している。アイコン的建築が地域の個性を形成している要素と意味的に結びつけば、新しい場所をつくりながらもかつての地域性を継承し、さらに強調することができる。

第二に、フラッグシップという手法の一般化である。世界中で「ビルバオ・エフェクト」が起こればアイコン的建築はグローバルな視点からみれば均質なものとなる。

第三に、既存の地域的差異の観光資源としての利用である。すでに地域的特質がはっきりしている場所ではこれを強化することがアイコン的建築には求められる。

第四に、アイコン的建築自体への批判である。フラッグシップの戦略は、地域内での格差、住民に利益をもたらさないなどの点で批判されている。アイコン的建築における形態と〈コンテクスト〉との記号的接続は、その存在に正統性／正当性を与えるための倫理的行為ととらえることがきる。

## 4. 結

エキゾチック・リージョナリズムは以上の社会的要請に応える、地域性を汲み取った建築だといえる。しかし、ある地域の内側の人間の地域性の観念と、外側の人間のそれとは必ずしも一致しない。エキゾチック・リージョナリズムに潜む危険性とは、地域に属する人間の地域性の観念と乖離した地域性をもとにデザインが決定されることだといえる。